

復興税の廃止と存続

本誌 3月号「平成26年度税制改正案の主な項目」に掲載しましたとおり復興特別法人税が1年前倒しで廃止されることになりました。言うまでもなく、復興税は東日本大地震の復興予算を確保するためにその負担を現役世代に求めた期限付きの増税です。その復興特別法人税を廃止するという事は「復興財源は潤沢！」だからなのでしょうか？

『被災地の現状』

今号が配信される8月初旬、私は石巻に里帰りしている頃でしょう。市街地を見渡す限り震災の爪痕はほとんど見受けられなくなりました。しかし、依然として約9万人の方が仮設住宅暮らしを強いられているそうです。他にも福島第一原発事故の汚染水問題など残された課題は少なくありません。

『復興予算』

震災があった平成23年3月11日の4か月後、政府は「東日本大震災からの復興の基本方針」を決定しました。この方針のなかで平成27年度末までの5年間を「集中復興期間」とし、その間に実施する公的事業は「少なくとも19兆円」と見積もられました。

復興予算として平成23年度は15兆円、24年度は5兆円、25年度は5.3兆円、26年度は3.6兆円を計上（単純合計29兆円）。執行未遂による多額の年度繰越重複分を考慮しても、十分な予算を設置したと言えるでしょう。

『執行状況』

前述のとおり予算は十分に手当てされたものの執行は遅れがちであり、平成23年度は9兆円（執行率60%）、24年度は6.3兆円（執行率通算75%）に留まります。この執行額には地方交付金の3兆円（執行率100%）が含まれておりますが、単なる国から地方への資金移転なので国・地方を合わせた現実の執行率は更に下がると思われます。

しかし、「復興財源の余剰金は復興以外の経費に流用してはならない」とされておりますので、執行率が低くても直ちに財源が無駄になることはなく、むしろ執行率向上を優先するあまり、執行が容易な事業や被災地と関連性が薄い事業などに予算が割り当てられることを危惧しなければなりません。

『復興財源は復興債』

ところで、計上された予算に対する財源はどうしたのでしょうか。まずは年金の国庫負担分の流用（2.5兆円）、子供手当廃止（0.2兆円）、高速道路無料実験凍結（0.1兆円）など約4兆円の既定経費の削減が行われました。その他、一般会計からの繰入や雑収入で賄いきれない約10兆円を「次の世代に負担を先送りすることなく、今を生きる世代全体で連帯し負担を分かち合う」方針に基づき復興税として私たちが負担することになったのです。もちろん税金が直ちに実現されることはありませんから、「つなぎ」として多額（23年度は11.5兆円）の復興債を発行することになりました。

『復興債の償還とその財源』

復興債は借金と同じですので必ず返済（償還）をしなければなりません。復興債の償還期間は借換債も含め25年間（平成49年まで）と決まりました。

当然ながら償還財源の軸は復興税です。それ故復興特別所得税は平成49年までの25年間という長期の臨時増税となっており、復興特別法人税とは異なり今後も存続されることになっています。

復興・復旧に向けての課題は山積し、復興債の償還をはじめとする財源の確保も容易ではない状況下での復興特別法人税の廃止は「復興財源は潤沢！」だからではなく、安倍首相の成長戦略の一環として。確かにどちらも大切なことであることは誰もが理解していることでしょう。

しかし、被災地のみなさんの思いは複雑……。政府及び復興庁には「復興に向けての加速」や「緊急性・整合性が薄い事業への予算の排除」が求められるところです。

私たちも、自分が今まで・これから・いくらの復興税を負担するのか知っておくべきでしょう。そして少なくとも平成49年（西暦2037年）までは、復興・復旧への意識を持ち続けることが私たちの権利と義務なのではないでしょうか。

（参考：参議院調査室作成資料/立法と調査 No. 353 「4年目を迎えた復興予算を振り返る」より）

（文責：逗子事業部 片山 晴夫）



ちょっと一息。コーヒブレイク

夏の暑さが身体にこたえる今日この頃、心理テストで気分転換を試みませんか？あくまでもお遊び気分、パッと頭に浮かんだインスピレーションのまま、サクサク進むと愉しめるかと思います。質問は4つです。



1. 砂漠の何処かに、キューブ(立方体)があります。その特徴を言って下さい。
2. その砂漠には、キューブだけでなく、ハシゴもあります。その特徴を言って下さい。
ハシゴは新しいものですか？それとも古いものですか？横木は何本くらいありますか？
3. その砂漠には馬もいます。その特徴を教えてください。
4. その砂漠の何処かで嵐が起こります。その特徴を言って下さい。

嵐はキューブとハシゴと馬にどんな影響を及ぼしますか？嵐の結果どうなるかを想像してみてください。

【解説】

1. キューブはあなた自身です。あなたが自分自身をどのように思っているかを表しています。
大きいほど自分のことが好きだそうです。
2. ハシゴはあなたの友人を表しています。横木の数はあなたが思っている親しい友人の数です。ハシゴが新しいか古いかは、友人の新しさ／古さを表します。
3. 馬はあなたの恋人です。あなたが自分の恋人をどう思っているかを表します。本物の馬を想像した人は実際に恋人がいる人で、おもちゃやぬいぐるみの馬を想像した人はいない人だそうです。
4. 嵐はトラブルです。どのような影響を与えたかで、トラブルに見舞われた時の対処がわかるそうです。
皆さんは、想像していた結果になりましたか？それとも自分の新たな一面に気づかされましたか？
ちなみに、私はこういった心理テストは頭の身体検査をされている気分になるため、家族やお互い気心が知れている仲間内で愉しむようにしています。お遊びだと分かっていても、自分自身さえも気づかなかった一面を見られてしまった暁には、恥ずかしくなってしまう小心者の私です。 (文責：逗子事業部 阿部 眞季)

「4スタンス理論」

4スタンス理論とは、人間にはそれぞれ生まれつき決まった身体特性があり、それを4つの種類に分け解明しようとする理論のことを言います。この4種類のスタンスは、先天的に持つもので、立つ、座る、歩く、つかむ等といった単純な行為でもそれぞれのタイプによって身体の形や動かす各部位の順序等が異なるそうです。

この4種類のタイプはどのように分けられているかという、「重心をどこにかけているか？」で分けられています。足の重心で言うと、Aタイプと呼ばれるものはつま先重心のことを言い、Bタイプと呼ばれるものはかかと重心のことを言います。さらに、内側重心を1タイプ、外側重心を2タイプと呼びこれらを組み合わせ、A1、A2、B1、B2の4種類のタイプに分類されます。



A1、B2と呼ばれるタイプは言わば「クロスタイプ」で、体の軸が対角(右肩と左腰、左肩と右腰)に走っている人のことを言います。また、A2、B1と呼ばれるタイプは言わば「パラレルタイプ」で、体の軸が縦にまっすぐ平行に走っている人のことを言います。

これらのタイプは、特にスポーツをする場合には非常に重要な要素で、走る、跳ぶ、蹴る、投げる、打つ等々全ての動きに影響があると言われています。子供のころ野球をしたことのある人なら誰でも大人からこう言われたことがあるのではないのでしょうか？「軸足に重心が残ったままだ！体重移動しなきゃ！」と。では、松井秀喜選手がホームランを打つ際のスイングを思い出してみてください。左足に重心が残って打っているのが良く分かります。彼はこの4スタンス理論でいうところのB2タイプ(かかとと外側重心)なのです。松井秀喜選手と全くタイプが異なるのがイチロー選手。イチロー選手はA1タイプ(つま先内側重心)で軸足に重心が残ったまま打っているのを見たことはありません。

このように人それぞれタイプが異なるので同じ方法がその人にとってベストな方法とは限らず、自分に合った方法を探すことが重要となります。現在この4スタンス理論はプロスポーツ選手の間でも注目されているそうです。スポーツ好きの方は是非参考にしてみてください。ちなみに私は、浅田真央選手と同じA2タイプです。

(文責：関内事業部 水谷 優)